

平成 30 年度

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同委員会

# 実践報告書

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同委員会

# 目次

○平成 30 年度 総会及び研修会要項	1
○講演会「『生きる力』から『みんなで生き抜く力』へ —自己肯定感の育成に注目した教育への挑戦—	2
○平成 30 年度 部会活動報告	15
<教科別部会>	
・国語部会	
・社会部会	
・理科部会	
・音楽部会	
・図画工作・美術部会	
・体育・保健体育部会	
・英語（外国語活動）部会	
・技術・家庭部会	
<領域別部会>	
・総合部会（生活単元学習・遊びの指導・生活科）	
・道徳部会	
・生徒指導部会	
・特別活動部会	
・進路指導（キャリア教育）部会	
・学校経営部会	
<校園別部会>	
・幼稚園部会	
○秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会要項・申し合わせ事項	42

## 平成30年度 総会及び研修会

○日 時：平成31年2月13日（水） 15:00～16:45

○会 場：附属小学校はとの子ホール

○進 行：附属特別支援学校教頭

出席者数 103名（学部及び大学院教員は33名）

○次 第

### 1. 研修会（講演会） 15:00～16:10

演題：「生きる力」から「みんなで生き抜く力へ」

—自己肯定感の育成に注目した教育への挑戦—

講師：宮城教育大学附属特別支援学校 副校長 榎村 恵三 氏

#### ◇講師略歴

- ・茨城県高萩市出身
- ・昭和56年3月宮城教育大学卒業
- ・公立小学校教諭，国立・公立養護学校教諭，宮城県教育庁義務教育課指導主事，公立小学校教頭，宮城県教育庁障害児教育室指導主事を経て公立小学校長，宮城県教育庁教職員課管理主事，宮城県南三陸教育事務所長，宮城県仙台教育事務所長，宮城県教育庁教職員課小・中学校人事専門監，県立光明支援学校長
- ・平成30年4月より現職

### 2. 謝辞・あいさつ（佐々木 和貴 副学部長） 16:10～16:20

### 3. 各部会 16:25～16:45

## 講演会『生き抜く力、自己肯定感の育成に注目した教育への挑戦』

宮城教育大学附属特別支援学校

副校長 榎村 恵三

こんにちは。榎村と申します。今日はこういう発表の機会をいただきまして、感謝を申し上げます。

パワーポイントが59枚ありますので、飛ばしてしまうなど不案内な所があるかもしれませんが、ご容赦いただきたいと思います。それでは、進めさせていただきます。

『生き抜く力、自己肯定感の育成に注目した教育への挑戦』というタイトルでございます。もうお分かりのように、新学習指導要領等々において、生きる力の育成等々出ておりますので、ここの所はもう簡単に触れさせていただきます。

生き抜く力は生きる力をベースとした総合的な力であるというふうなことも、これは皆様ご承知の通り、それをどのように具現化していくかというような所を今日はお話できればいいかと、このように思うところでございます。

当然ながらインクルーシブな共生社会というところで、助け合ってみんなで生き抜いていこうという、“みんなで”というのがキーワードになっています。

ここは皆様がもう既に、こういうことはやっているというようなことが多々あると思うんですよ。ですから今日は、宮教大附属でやっていることっていうのはうちでもやっていることだし、むしろこういうことだったら、うちの方が進んでいるというような確認というか、検証の場であっていいのかなと思います。

先程も言いましたように、一人ではできないので、みんなでやっていく、みんなで取り組むことが大切であるということでございます。キーワードはたぶん知的障害のある子ども達、障害部分に寄らずなんですけれども、自己肯定感を育成していかなければならないだろうし、共同で作業する場においては自分が役立っている。「ああ、良かったな、僕がいた、私がいた」っていうような、この自己昂揚感、ここの所はもう皆様、教育課程の中においても、各授業の中においても実践なさっているところだと思います。みんなで生き抜く力を育成するための教育の実現を目指していく。これは私どもの今回の大きなテーマでございました。

それぞれ持てる力を育成するテラーメイド。一人ひとり違っているので、服にしても、何にしても、それに合った教育課程、個別の指導計画も含めてテラーメイド的な学習もしておくべきというところでございます。

今日はそういった中で、私どもの持っているものとするれば3本の柱でお話ができればいいかと思います。1つ目は新しいスタイルの様々な防災教育。2つ目は附属小中学校の通級教室としての新しい学習支援室の取り組み。3つ目は大学と連携した様々な教育活動の可

能性というようなこと。

これはお手元の資料等々に準じてパワーポイントを流しておりますので、お手元の資料を読んでいただきながらでも大丈夫でございますので気楽に聴いてください。

生き抜く力としての防災教育の取り組みというのがあります。皆様、もうお分かりのように阪神淡路大地震であるとか、東日本大震災とかを経験して、防災教育というのは大切なことであるというようなこと。特に、知的障害のある子ども達にとって、命を守る、自分で守る、どこまでそれができるかというようなところになると思います。

私、先程の紹介に教育事務所長を経験するという所ありますが、南三陸教育事務所長です。3.11の時は、県の教職員課の人事班長でありました。あの時人事を止めませんでした。宮城県教委は人でないと、学校の先生の人事を止めないということはどういうことなんだということで、お叱りのFAXを山ほどいただきながら、地震・津波の後処理等々をさせていただきました。

その4月1日に南三陸教育事務所の方に行って、つまびらかにその被害の状況であったり、私の担当は教員の方の安否なんですね。ですから教員で亡くなられた方のすべての情報が私の所に集約されて、まとめていくというような仕事をさせていただきました。

ですから、大川小学校で、お子様がお亡くなりになった陰に、同時に素晴らしい先生方がお亡くなりになったというようなことも逐一電話の報告を受けて、それをまとめた。その時にやはり後から出てきますけれども、命を守るという、「教師が」と言った時に、「学校の校長先生がいなければダメなのか」というようなことではないと。きっちりと状況を判断しながら、いろんな情報を集めて、どうするんだというようなことをまとめて、管理職であるとか、そういうような所を関係なくやっていくんだというようなところが必要だ、というような所を経験してきている人間でございます。

ですから、防災教育なんて特別なものではなくて、日常的な生活の中の応用として求められるものだろうということでございます。

避難訓練に関しては、避難誘導側、教師が学ぶ所、誘導される側、この2種類の訓練が必要であると言われております。指示がなくても回避できるようなことを通常学級、学校でも同じなんですけれども、そういうことを特別支援学校でも身に付けさせていくというような所が大切だという話です。

ここにあります右側の写真は、車いすの設定です。この学校でもどうでしょうか。車いすを使つての避難というものをしていますか？これは逃げ遅れた時に、この子、大変失礼なことをいうかもしれませんが、傷病者になってもらったんです。我々の所で、逃げなければならぬ時に、この子体重が重くて、遅くなって、歩いてもとぼとぼとしか避難できないという。ですからそういうお子さんがいた時にも車いすを使う。決して足が悪いからとか、そういうことではなくて、逃げると言った時に、あらゆるものを使って、みんなと同じように命の保証をしていくというような訓練をすべきであるということで行っています。第1次避難から第2次避難、宮教大のグラウンドを歩くんですけど、だいたい1キロないかな、800

mぐらい大学の方に向かって避難していくというようなことを訓練していました。

火災、地震に対する避難、不審者対応ということをお話させていただきますけれども、特に私が言いたい所は、ここです。切り替わる年度初めっていうことになります。切り替わる年度初めってというのは、どんなことかという、もうおわかりのように、3.11ってというのは3つの奇跡があったと言われていました。

気仙沼市の教育長、白幡教育長ですが、こういうことを言ってくださいました。「樫村さん、3.11の時に3つの奇跡があったんだ。なんだと思う？1つは3月だったんだ。」と。もうお分かりですね。4月ではなかったんだ。3月だったから、目つぶって。2時40何分。例えば、子ども達を放課した時に、今地震から放課して10分だったら、これぐらいの所歩いてるよなっていう想像つきますよね。3月だったら。これが4月だったらどうですか？どこに家があるかもわかりませんよ。親御さんの顔だって見たことないというようなこと。3月ということに奇跡があったと。

先程時間も言いましたが、2時46分。これは殆どの子ども達が学校にいた。学校が守った。ただし、2日前に同等の地震があったんです。その時に津波が来なかったんですよ。だから引き渡してしまったところもあった。それで尊い命を落としてしまったというようなことがありました。学校が守ってくれたっていうのが、その時間帯であったということ。

そして最後の3つ目は、地質学者の白幡教育長先生。理系の方です。「樫村さん、最後は干潮だったと」。満潮でなかったということですよ。気仙沼であったり、女川であったり、静川、湾があります、リアス式の。あそこの所に満潮だったら、もっと奥の方まで津波が押し寄せてきて、大変なことになっていたっていう。

ですから、私なんかは光明支援学校に、現場に戻っても、そういうお話がある時には、「釣り好きな人、手上げて」「海釣り好きな人」ってなると、間違いなくわかりますから。干潮か、満潮かっていうのは、それで釣りしてるようなものですからね。

3つの奇跡があったんです。それは裏を返せば、熊本は大変でした。4月でしたから。というふうに慮っていったときに、我々がいつ何時っていった時に、四季折々のそのタイミング、タイミングにおいて、防災すべきものは何なんだっていうのを確認しなければならないということを私は学びました。そしてここでお話する機会を得ているところでございます。

次、行きます。ここの所は当たり前前の所なので、皆さんがやっていることなので飛ばします。子ども達に避難袋を準備したんです。障害のある子ども達が、各々のオーダーメイドの避難のリュックに、その子の大切なものが横たわってます。この子は犬のぬいぐるみがあると落ち着くんです。ですから避難袋の中に、その子が落ち着く、何かツールを入れておくということです。

やっぱりこだわりのある子からすれば、分かるような気がしますよね。こういうようなぬいぐるみなども間違いなく入れてもらいたい。実際に使ってみて、持ち易いとか、紐の長さとかを調整して、一人一人避難のリュックっていうのは形状が違います。

次に引き渡し訓練。外側から入ってきて、ここの消毒用マットを踏んづけていただいて、

前に出て、名前の確認と。こっち側に子ども達が待機しているというようなことを実際にやりました。ここで皆さんやっているとすれば、どこが違うのか。実際に消毒用マットを使ってみたということです。それによって、動きっていうか、動線が変わったりするんですよ。ここにあるはずだとかじゃなくて、実際に置いてみる、やってみる。そして消毒液がいくらかかるんだっていう、そういうようなことも含めて、実践していかれるといいのではないのでしょうか。

不審者対応の話になります。小学部は衝撃的なので、バタバタと実際の動きを見せないで、高等部とか、中学部になると実際に子ども達がいるところで練習、シミュレーションをするというようなこと。これも皆さん、やっていることだと思います。

続いて、水難事故に備える着衣水泳となります。今回何度も言いますが、皆さんも実践なさっていること、これを改めて洗い直して、確認していく時間が必要だと思います。この部分は、やはり一人ひとりが持っている命に関わるというようなことの発想力っていうか、企画力というようなことが大切なんだということ。

うちの校長と話しながら、なんで特別支援の子ども達、着衣水泳ってやらないんだ。やっちゃだめ？やらない？やる？であるならば、というような話です。

着衣水泳の意味をどう理解するのが難しいとか、親御さんからのここがネックだったですね。「先生、やめてくださいよ」って。「プールやお風呂に入っていないって勘違いして、誤学習があるでしょ」って。

ちょっと、待ってください。後から出てきますがピザ釜、火を使います。火を使うのは許されるんですか？火、使ったら、放火したってっていうふうはならないってというのは、どういうことなんだと。

誤学習で、これをやったからと言って、こういう可能性は未だかつて聞いたことがありません。やってないんです。子ども達、わかるんですよ。信用していくっていう。親御さんたちがもうバリアを張ってしまうという。やらせていただきました。あとで時間があれば、この動画をお見せしたいと思います。

こういうふうには低学年の子ども達も歩き回って、30センチで溺れるっていうこともありますから、そういうような濡れるというようなこととか、自閉の子どもからすれば、濡れるなんていうのはもうもってのほかの子もいますからね。逆に水が大好きではないっていう、そういうようなところ。でもこれは勉強しているんだっていうようなところを、子ども達に話しています。

親御さんを説得するとか、納得させるためにやっぱり公的なものの力を借りる。学校だけではどうしようもないところがありますね。もう先生方もその通りで、学校の先生がやるべき所、やれる所、限界、限界があるならばどこの力を借りるかっていうようなこと。

この時は消防局の特別機動隊の方たちと打ち合わせをしました。さあ、やるぞっていった時に、北海道の地震のために全員が北海道に行っちゃったので、そのところはできませんでした。でも、我々が動いたことによって、この方たちは、知的障害の児童の実態に詳しく

ないので、救助する側に知的障害のある児童生徒の特徴を認識してもらおう。

我々が動くことによって、助けてもらえるはずだということを発信していかなければならない。ですから、この時に特別機動隊の方が3人来て、「逆に教えてください。どういう子ども達がいるんですか？」そういうようなところからなんですよ。ですから、そういう命を守るとは言った人達、先程は不審者で警察の方は当然入ってくる訳ですけども、消防署、それでも着衣水泳まで進むことによって、いろいろなお力をいただくというようなこと。

防災グッズ作りの学習とあります。非常持ち出し袋、先程の物の一つに防災ポンチョという物があります。このポイントは、日常生活にあるものを利用して、防災ポンチョを作る。ミシン目、はさみを使えない子どもというのは、もうわかりますよね。もう子ども達に道具を使わせると言った時に、その子のできる特性を活かしていくということ。はさみの使えない子どもは、ミシン目カッターを使用して。

ポイントは、このようになる訳ですけども。自分用の防災用品を作るっていうことです。あるものを持ってくるんじゃなくて、ゼロから、この袋がこういうふうになるんだねえ、っていうようなこと。ややもすると、それなんかも、「これ、被って」と言うようなことになってしまうんですが、自分で自分サイズの物を作る、というようなことが大切になってくる。このように、子ども達が自分の物を作っていくというようなところ。

続いて、防災非常食。非常食学習ですね。やっぱりなんて言っても、食の確保が大切だということです。日常に至るまで生き延びるということになりますけれど、日常生活の能力の育成の延長上にあるという、非常食に関する防災教育っていうのは、ほんと大切だろうと思います。

本校では、このように非常食以外の防災食作りというようなことで、牛乳パックホットサンド、1分パスタ、ポリ袋ご飯等々。もうお分かりのように、想定は電気がない、ガスがない。冷蔵庫に、「あっ、こういうのが残っている」って言った時に、ローリングストックも含めてですが、何ができるかっていうのを子ども達がわかるっていうことです。そういうふうにできればいいなあって。一人ではできない。だから何回も言うようにキーワードは、『みんなで生き抜く力を身に付けていこう』と。

牛乳パックホットサンド。食パンにピザソースを塗って、スライスチーズなどを混ぜてサンドイッチにして、アルミホイルで包んで牛乳パックに入れる、牛乳パックを燃やすんですね。そうすると中が暖かいホットサンドが出来上がるという。1リットルの牛乳パックを上手に使って、半分ぐらいに詰め込んで、上の方を燃すと、すべて燃えると中があったかくなって食べられるようになってる。うちの方では、学校給食で使っている冷凍パン、ピタパンなどにも具材を入れて、同じように牛乳パックの中に入れてやっています。

1分パスタ。これなんかおわかりのように、登山などでやっているものでございます。簡単な料理法、調理法なんですけどね。こういうことをやると燃料を少なくして、上手に食べることができる。ラップで覆った小型容器にドレッシングやマヨネーズをあえるとか。鰹節、刻み海苔、ゴマ、ツナなどを入れるんです。こだわりのある自閉の子でも、雰囲気としてこ

れは食べなきゃだめだなと思ったら、食べるんですね。これは、びっくりしました。

「これ、普通給食だったら食べないよな」っていうような味付けが、こういうような所で作られたもので、提供させられる。提供されると、子ども達は、なんの抵抗もないというのは嘘ですけども、食べます。食べるんです。やっぱり根っこの部分で、これは食べなきゃダメなんだなというような意味が体の中に出てくるという話です。乾麺を水に浸して置いておく、1分位で茹でればできますよ。時間はかかります。1時間半とかって、水につけていかなきゃなりませんけども。小学部でもパスタのみずくりができるようにいう、やっています。

うちの学校には収納のスツール、ベンチとの連動ということで、これ、座るベンチになっているんですが、その中にヘルメットや防災用のキットが入っています。

ポリ袋ご飯、電気がなくても炊けます。ガスは必要になってくきますが。先程も言いましたように、ガスなのか、電気なのかっていうのを見極めて、こういうことができるっていう。間違いなくこれをやっているということは、親御さんたちまでもわかっているという話ですから、町内会とか、そういうところで、親御さんがリードして、その子どもさんを使って、どんどん防災食づくりの力を発揮するというようなこと。

子ども達が洗米って、やっぱり米をとぐのが苦手なので、水きりネットなどを使って、その中に洗ってない米を入れて洗米するというようなこと。そういうことができるようになった。これも、洗えない子ども達、気になる子ども達に対して、なにをどうすればいいかというようなヒントが隠されている。皆さんもやっていることなんだろうと思いますけども、うちもこういうふうにも水きりネット使って、米とぎをしています。

これが大切なんですね。学校で常備している食材のパスタや米を使ったっていう、それを防災教育の計画へ組み込む理由。食べることができる。これは本当に大切なことです。皆さん、どうですか？町内会でテント張って、いろいろなものを作ってくれたのに、とか。作ったのに、食べない。「うちの子は食べられないんです」「あっ、そうなの」って言った時に、どういう空気が流れるか。とにかく食べることができるっていうことです。好き嫌いなし、って言いません。一口でも食べられる。そのためにいろんな訓練をしていくっていうことです。

先程も偶然なんですけれども、食べられないよなって思っても、食べられる。そうなった時に、親御さんは「この子はこういうものだったら食べられるんです」ってお話できる、町内会の人にね。炊き出しをしてくれる人に、「この子はこういうの食べられないんです」っていうのも言える。

中学部あたりになると手伝って作ることができる。高等部になると一人で作ることができる。作り方を教える。「こうやったらいいよ」というようなこと。これを教育課程の中に組み入れていくということです。

うちの学校では“みんなで”が合言葉なので、小学部と高等部が合同で非常食づくりの実践をしています。小学部の子どもはお兄ちゃん、お姉ちゃんの話の聞くんですね。副校長の檜村の話や指示よりも、お兄ちゃん、お姉ちゃんがこうだ、ああだってやるっていうと、ほんとにこれは「受援力」があるっていう話です。助けてもらう姿って、ほんとに大切なんです

よ。「助けられ方」っていうようなことを我々が分かっていなければダメなんです。「はい、右行って」って言った時に、左に行っちゃうんだけど、この時は真ん中でもいいから右の方に行かねばならない、ということを訓練の中でしていく。

先程紹介しましたピザ釜の話です。うちの学校でついにできました。2層式のピザ釜を2基作ったんです。中学部の卒業制作として作りました。子ども達が耐火煉瓦を積んで、一生懸命作ってできあがるという。「火は10人の友を集める」と言いますが、ピザ釜はもう全校生徒を集める。親御さんたちも集めてしまうみたいな感じですね。もうあつという間に焼けるんですよ、ピザが。これのピッツアの具に関してもアンケートがくるんですよ。「副校長先生、何のせたらいいですか」って。

面白いのは、ここに生活単元学習なんかが入ってるなって思って、産業学習も入るんですけども。ピザのチーズの量とか「多い」「少ない」「だいたい」というのを言葉でOKなこと。写真で、これが多いっていうぐらいのもので、これは少ないっていう、どれを選びますか、みたいなことをやる訳ですね。「ピーマンは除いてください」とか、わがまま言う訳ですよ。それでも作れるっていう話になります。ピザ釜レストランっていうのを作って、小学部の児童と一緒に作りました。高等部の生徒と小学部の児童、中学部の生徒と小学部の児童と一緒に作るのです。これがうちの学校の敷地内にあるんですよ。隣りが生活訓練棟なのですが、幼稚園の園児やPTAの方たちにも貸しております。だからバーベキューとか、夏やってもらって、今回はピザ釜ができたので、「夏休みはピザ釜を使ってください」というふうになるかと思います。

先程も言いました通り、普段はベンチとして使える担架ベンチ。足の方が取っ手になる訳です。一人分乗せられると。下は、これキャリアになっていますので、一人でも括りつければ、車輪と言いますか、タイヤがありますから、引っ張っていけます。ここに緊急のものを置いておく。至る所に救急に必要とされるものを置いているということになります。

2つ目でございます。附属学校園を支える通級学習支援室の実践ということ。宮教大の附属小学校には特別支援学級はない訳ですね、選抜でいきますから、中学校にもないですね。

そういう時に軽度発達障害の子は、やっぱりいらっしゃる訳ですよ。その子ども達の学びにくさがあり、どんどん不登校になっていくという現状がありました。そこをなんとかしたいということで、専門性のある特別支援学校の先生及び特別支援教育の教授、先生方等々が知恵を出し合って、2010年から小学校に「サポートルーム」を設定しました。定数はうちの特別支援学校の方の一人を小学校に常駐させているということです。そこで心理検査もしながら、親御さんへのサポートをして、学びにくさ、この子はどのような所に課題や、学校に来られない理由があるんだなというような所を共有するということ、ずっと続けていきます。

2018年からは「アシストルーム」を設置しました。小学校で完結はしませんから。中学校になってから、また不登校になる子どもさん達がいる訳です。そのお子さんたちに対して、

どんな支援をしたらいいかっていうところで、中学校の中に視聴覚室の一角を改造させていただいて。ここに学びにくさを感じる生徒さんが来ています。

担当が言うんですね。「表面的でかっこつけしい」なんだって。「できるよ、俺、大丈夫」って。口だけ。ほんとにこれやっごらんっていうとできないんです。そこからいろいろ時を同じくしていくと不器用さ、手と目の協応動作であるとか、そういうような所に着目して、けん玉であったり、けん玉っていうのは、もう膝で入れるようなものですから、膝で入れる。そういうようなことですか、あとはバランスボールであったり。息を吹き切る。「フッ」ってできない子が多いんです。だから昨日なんか大変失礼ですけど、ラーメンすすれないタレントの女の子いましたね。ラーメンすすれません、できないんです。できると思ったら、できないんです。そういう人がいる。

この生きにくさの子ども達、なんて言うんだろうなあ。コミュニケーションだけではなくて、こういう所に不器用さがある。ここはまあいい、半円の所を歩くんですけど、まっすぐ歩けないと。そんなところがあるんですよ。

ですから、表面の所でこの子が来れないとか、できないんだなという前に、この子の運動能力、感覚、そういうところを是非見てください。サポートルームの先生、アシストルームの先生も、うちの特別支援学校のメンバーなので、上杉っていう、20分ぐらいかかるところから戻って来てもらって、月1で青葉山会議というのを行っています。「次の指導をどうすればいいんだ」っていうような話し合いを1時間以上します。その中で、中学校の先生が自分たちの生徒の活動を褒める、『褒め褒めノート』を作るというのがでてきたんです。これが中学校の先生がアイデアとして出した訳ではないんですよ。離れている我々がなんで、自己肯定感、自己顕示欲じゃないけど、達成感とかって言うのを。「どうすればいい」って言った時に、「いい所見つけてくれよ」っていう。学年主任とかに褒め褒めノートみたいな、「とにかく顔出して、一言褒めて帰ってくれ」って。それを約束してもらって、そういうようなことをさせていただきました。

次、行きます。ゲーム性の云々というようなところで、ICTの導入。これなんかも本校の校長が得意とするところで、大学生も巻き込んで、ロボットプログラムなどをやっごすんですね。なんと全国ロボット組み立て大会が大坂か、どこかであった。不登校の子どもが優勝してしまったんです。チャンスがあればそういうふうになる訳ですよ。それで、近いうちに学長賞もらいます。だって、全国大会で優勝したんです、中学生が。どこに何があるんだって言った時に、我々は本当に子ども達のためにとって思っているのが、子どもたちのためになっているかっていうようなところを、つくづく思います。

面白いんですね、プライドがあって、水谷校長がプログラミングで宿題出して、「こんなの簡単だよ、できるよ」なんて言って、やっぱりやり遂げちゃうんですね。で、「学校来たくない。何それ」みたいな。そういうような所がありながらも、学校に来るようになって、そして不登校気味のお子さんたちが、もう今は受験、合格云々、私立のね、そういうようなことになって、それが合格しましたとかってというように、すばらしい答えが出てきたりと

いうことになっています。

だから、通常学級との仕切りを低くする効果が期待されるところで、大学の方でも、アシストルームは先程言いましたように視聴覚室の一角なので、ただ半分に仕切っただけだったんですね。それでは全然ダメだということで、いろいろなものを買ってもらいました。集中できるように仕切りをつけて勉強するスペースを準備しました。あとは、アシストルームの先生が美術系なので、水槽が必要だとか、流しが必要だとか、そういうことに対して、大学がすごく協力的にやってくださって。

先生方もそうですし、我々管理職にしても、どんな風に大学から予算を捻出していかって、働きかけていうのは子どもたちからなんだと思うんですよ。私は言うんです、2人の優秀なルームティーチャーに、「あんたたち、こうやっていると色々な所で素晴らしいねって言われてても、私から言わせると一つ注文がある。親御さんがどう変わったかじゃないかって」。

子どもが変わる、そこで終わるような発表の仕方じゃないだろうと思う。親御さんが一番喜ぶんだ、親御さんが一番悲しむんだ。親御さんのことまでも発表の中には是非入れてもらえるとありがたいと言っています。

とにかくスタートについたばかりなんですね、アシストルームなんて1年しか経ってないところなんですけども、色々な所で発表させていただきながら、まだまだこれからというようところで進んでいるところです。

宮城教育大学附属小学校や中学校には特別支援学級がないから。特別支援学級でどう教えたらいいかっていうような情報をもたず、小学校とか中学校に来られる先生がいます。特別支援学級の先生方とどうレポートをとって、話をして、チーム、学校として、組織として生きてきたかっていうのがわからないとなかなか難しい。子どもがそこに落ちこぼれになってくるっていう、落ちこぼれじゃなくて、置いてかれてしまう。そういうことを感じています。だから我々特別支援学校の方でできることは、これまで述べてきたようなことを踏まえながら、小学校や中学校の先生方と対峙して、進めているという話です。

3つ目の話題になります。本校は昨年度50周年記念式典がありました。その記念品をどう作ればいいんだということで、本校校長が音頭をとりまして、大学教員と学生も含めていろいろなものを作りました。

コースターであったり、小学部ですとステンシルでエコバックにロゴマークのデザインをしたりですね。こういうことを、例えばデジタル加工の技術を利用して作ることにあります。レーザーなので、同心円に上手に切れるカッターがありますが、それは子どもたちは出来ません。そこでないので、大学の方の力をお借りして作った焼印を押したりしています。

次はv v f ケーブル、被覆、電線の皮むきですね。こういう作業は通所作業所から、電線の皮むきしていくくらいっていうのを下請けとしてやらせてもらっています。したたかにも製品は作業所におあげしますから、うちの子どもを雇ってくださいと言っています。作

業所では作業員の方がやる訳なんですけども。よりこういうふうにした方がいいんじゃないですかっていうのを、附属特別支援学校の高等部、そして本校の校長や大学生が考案する訳です。こうやると安全で安心で決められた時間で、決められた長さを切ることができますよって。それを作業所の方にお返しする。子どもをまたそこに行かせるというような win-win の関係を保つというようなことがあります。

これはどこの大学でもやっていると思うんですけども、学生の読み聞かせの中で発展的に視覚的にものを訴えるというようなところで、『ぐりとぐら』のカステラ作りなども毎年やっています。また、英語のクリスマス会。あとはサッカーやヤギの飼育と作物栽培。

最後です。やっぱりここに帰るんだろなあと思います。生きる力からみんなで生き抜く力の育成というのは、決して特別なことではないっていうことです。社会で出会う様々な困難を乗り越えていくために。ですからこの所は、みなさんもやっぱりそうだよなって言った時に、じゃあ秋田の附属ではそのために何を打ち出すんですかっていう話です。

私どもは、いみじくも今お見せできるぐらいしかできません。やってません。でも終わりではない。うちの校長が言ってるけども、失敗してもいいとは言わないけれども、完成の先、もうエンディングはないんだというようなところを言っています。

我々は「受援力」、誰かに「助けてくれ」って言える力も必要です。それって障害のあるなしに関係ないですよ。我々だって、素直に「助けてくれ」って言えるって、そういう人間関係ができて、それが保証されるようになれば、受援力から今度は支援力に変わってくる。障害のあるなしに関わらず、そういう人間関係って言うのはとても大切だということで、一人はできなくても、みんなでなんとか生き抜いていけるようにしてあげたい、そのような教育の実現を目指していますということです。校長からお預かりしてきたパワーポイントの説明、走りました。秋田に来て、こんなに走るとは思いませんでした。

最後に。10月4日公開研究会があります。「ぜひお会いしましょう。」と校長に「言って来い」って言われてました。以上です。ありがとうございます。

▼榎村先生、どうもありがとうございました。せっかくの機会ですので、お時間のない所ですが、なんかご質問いただきたいと思いますが、何か、お聞きしたいこととか、皆さん、いらっしゃいませんか。お一人ぐらいだと思いますが、よろしいですか。

そうすればこの後の予定の時間もありますので、榎村先生からたくさんのお話をお聞きしたいところですけれども、これで閉じたいと思います。

最後に教育文化学部の佐々木和貴副学部長がお礼のご挨拶を申し上げます。

▼佐々木副学部長：榎村先生、本日は大変興味深いお話を、なかなか面白い映像を、ありがとうございました。学部長が今大学本部の重要な会議に出席中ですので、代わって私の方から心より御礼申し上げます。

秋田大学でも防災教育っていうのは、力を入れているところではあるんですけども、や

はり 3.11 を経験した宮城の学校ということで、復興から未来へつなぐと言える防災教育、やっぱり我々すごく学ぶ所が多いと思いました。いろんなアイデアをいただきました。

非常食学習っていうのは非常におもしろいですね。やっぱり生きていかなければいけないので、ああいうことを教えるっていうのはすごい大事なことだと思うので、特別支援だけでなく、我々も考えていかなければいけないし、みんなで生き抜く力って言うのはとてもいいフレーズだと思いました。みんなで生きていかなければいけないし、その力をつけるというのは大変参考になりました。

昨日、うちの大学にも『鳩カフェ』という企画がありまして、特別支援の子が来て、自分達でコーヒーを入れて、それを売るっていうので、非常においしいコーヒーなので、私もお昼休みに行って、飲ませていただいたんですけど、その時の特別支援の子ども達のすごい充実した顔を見まして、やっぱり榎村先生がおっしゃるように、学校の中だけではなくて、大学とか、学生の中で、その連携の中で子ども達を伸ばしていくっていうのが、とても重要だなと。それがあの子たちのみんなで生き抜く力をつけるために、たぶんポイントになっているんだろうなっていうのを、すごく実感したところでした。秋田では試みをしているということなんですけれども。

こうした観点からしますと、この共同委員会、年に一度ですけれども、大学と附属学校園の先生方が一堂に会して、いろんな話ができる非常に貴重な機会ですので、ここにお集まりの先生方で、是非大学との連携の中で、子ども達をどう育てていくかということ念頭において、これから30分程度短い時間ではありますが、活発な議論や情報交流をしていただければと思います。

最後になりますが、遠路雪模様になりましたが、こういう時期にお出でいただいた榎村先生に改めて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

▼榎村：ありがとうございました。





# 平成 30 年度 部会活動報告

部会名	国語	記入者名	小松田ひかり（附属小学校）
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4 / 2 6 附属小学校校内研修会</li> <li>・ 6 / 1 附属中学校公開研究協議会</li> <li>・ 6 / 8 附属小学校公開研究協議会</li> <li>・ 6 / 3 0 附属特別支援学校公開研究協議会</li> <li>・ 1 1 / 8 附属特別支援学校オープン研修会</li> <li>・ 1 / 2 4 附属小学校オープン研修会</li> </ul> <p>・ 上記の研究会等に向けて、教材選定から教材分析、事前・事後検討会まで、ご指導いただきながら、授業作りを進めることができた。</p> <p>・ 附属小学校では教材分析協力者として教科専門の大橋先生にも</p> <p>・ 小中で授業を相互に見合ったりすることで、連携や児童生徒の発達段階に応じた指導について相互理解を深めた。</p> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学の国語科の先生方をお招きして、小学校、中学校で授業を行っていただく機会を設けたい。</li> <li>・ 5 / 3 1 附属中学校公開研究協議会</li> <li>・ 6 / 7 附属小学校公開研究協議会</li> <li>・ 1 0 ~ 1 2 月 附属特別支援学校オープン研修会</li> </ul> <p>・ 次年度から三校のローテーションで体制を作っていく。</p> <p>2019年度 副部長：小 書記：特</p> <p>2020年度 副部長：特 書記：中</p> <p>2021年度 副部長：中 書記：小 . . .</p> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p> <p>部会長 羽田 朝子</p> <p>副部会長 鎌田 雅子</p> <p>書記 伊岡森 真由</p>			

部会名	社会科	記入者名	鈴木 聡 (所属 附属小)
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 公開研究協議会 に向けた取り組み <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小中とも公開研究協議会に向けて事前打ち合わせ・指導案検討を行った。 事前打ち合わせ 小学校：5月15日(火) 中学校：5月9日(水) 公開研究協議会 小学校：6月8日(金) 中学校：6月1日(金)</li> </ul> </li> <li>2 部会内での取り組み <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校：部内研究会(11月：3年, 4年) 次年度研究に向けた授業を見合い, 授業改善につなげる検討会をもった。</li> <li>・ 中学校：授業を見合う会(1月：1年) 今年度の反省をふまえた普段の授業を見合い, 授業改善に生かす試みを行った。</li> </ul> </li> <li>3 共同研究の取り組み 秋田大学の社会科教育学研究室による授業づくり演習の一環として, 「クニマス」をテーマにした授業実践を行った。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校での実践： 7月17日(火) 13:40～15:15 (4年C組)</li> <li>・ 中学校での実践： 7月18日(水) 10:45～12:25 (1年D組)</li> </ul> </li> <li>4 初等社会科での講義 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 将来教職を希望している学生に対し, 社会科を学ぶ意義, 社会科の授業の在り方について, 4回にわたり講義を行った。</li> </ul> </li> </ol> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 公開研究協議会に向けた打ち合わせ, 指導案検討</li> <li>2 部会内での取り組み(小学校：部内研修会, 中学校：授業を見合う会 など)</li> <li>3 授業づくり演習(学生による授業実践) 小学校：7月上旬～下旬(詳細未定) 中学校：7月上旬～下旬(詳細内容)</li> <li>4 初等社会科での講義</li> </ol> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 部会長 外池 智先生(秋田大学)</li> <li>・ 副部会長 石井 史知 (附属小)</li> <li>・ 書記 小熊 大樹 (附属中)</li> </ul>			

部会名	理科	記入者名	石井照久 (教育文化学部)
<b>&lt;今年度の実績&gt;</b>			
<b>附属小学校</b>			
<p>○公開研究協議会(6月8日)では「ゴムの力を調べよう」(村上3C),「電流の働きを調べよう」(清水4C),「水溶液の性質と働きを調べよう」(渡部6A)の3つの研究授業を行った。研究協力者は学部の川村と田口で,教材分析協力者は学部の林(正),岩田,清野であった。研究協力者に加え教材分析協力者からの詳細な教材分析が授業研究に活かされた。</p> <p>○秋のオープン研修会(11月22日)では「水のすがたと温度の関係を調べよう」(清水4B)を行った。研究協力者は学部の川村と田口,教材分析協力者は学部の岩田と清野であった。学部教員の協力により,水が氷になる現象についての原理や,その現象を可視化するための教材等,授業研究の質を高めることができた。</p> <p>○防災教育「身近な自然災害」を学部の田口が5A,5B,5Cの3クラスに各1コマずつ授業を行った(9月14日と26日)。その結果,子どもたちが実際に遭う可能性がある自然災害について考えを深める機会となった。</p>			
<b>附属中学校</b>			
<p>○公開研究協議会に向けて事前打合・指導案検討を行った(5月9日)。</p> <p>○公開研究協議会(6月1日)では「天気とその変化」(2D 池田),「化学変化とイオン」(3A 島田)の2つの研究授業を行った。研究協力者は,学部の川村と田口,教材分析協力者は学部の岩田,清野,本谷であった。学部教員の協力により,協議会に参加した公立学校の先生方からは「自校でも実践してみたい」という感想を頂け,研究校としての役割と研究授業の効果を実感できた。</p> <p>○総合的な学習発表会(通称 DoveAcademy ダブアカデミー)(10月13日)での理数のプロジェクトとして11時30分~12時20分の50分程度で秋田県の小学校6年生50名を対象としたワークショップを附属中学校第2学年の科学部員が実施した。内容としては①「雲をつくろう」,②「食塩水を使って虹をつくろう」,③理科の実験器具の使い方,であり学部の本谷が協力した。中学校の学習内容が中心だったため,小学生にとって興味関心を刺激されるものであり,学部教員の詳しい解説もあり,小学生は楽しみながら参加していた。</p> <p>○附属中学校の生徒から希望者を募集し,秋田大学教育文化学部の理科教員の出前授業として科学講座を3回行った。10月19日には学部の本谷による「山雪と里雪—秋田の雪の恵みと雪害—」(25名参加)が行われた。11月16日には学部の石井による「海の生き物をみよう!」(16名参加)が行われた。12月21日には学部の河又による「メンデル遺伝とその理解—お酒の強さはどのように遺伝するか—」(19名参加)が行われた。日常と深く関わり発展的な内容であるため,参加した中学生が高い関心をもって質問する姿が見られた。</p> <p>○授業を見合う会(1月30日)では「ダニエル電池」(2B,2C 池田),「大地の変化」(1B 菊地)の2つの授業を学部の川村の協力のもと実施した。授業では見えるトークを取り入れたため活発な話合いが展開され,終始建設的で楽しい雰囲気が感じられた。</p>			
<b>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</b>			
<p>附属学校のニーズと学部で実行可能な題材をすり合わせるにより,様々な形で附属小中学校と学部との連携をより強化していくことが確認された。具体的には,ダブアカ</p>			

デミーの時間を拡張することや、日食観察などの天文イベントを追加で実施し子どもたちの興味・関心を高めていく機会を増やしていくこと、などがあげられた。

**<次年度の体制>**

部会長：石井照久

副部長：渡部誠一郎

書記：島田勝美

部会名	音楽	記入者名	吉澤 恭子
<p data-bbox="240 331 464 360">&lt;今年度の実績&gt;</p> <p data-bbox="240 412 400 441">附属小学校</p> <ul data-bbox="252 461 1422 1122" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="252 461 1422 636">・ 6月8日（金）に開催された公開研究協議会では、低学年および中学年のクラスによる提案授業がなされた。1年生では主に歌唱、3年生では主にソプラノ・リコーダーの実践を取り入れた内容で構成され、いずれも「表現」と「鑑賞」を融合した実践へと展開した。</li> <li data-bbox="252 656 1422 927">・ 学部3年生に開講されている「初等音楽」（後期担当：吉澤恭子）において、附属小学校における「訪問演奏会」という企画を導入した。同企画は、実践演習をふまえた小学校教員養成・音楽科目の充実化を意図としている。今年度は小学校1年生（3クラス）を対象とし、2018年11月10日（金）に行われた。小学校側と大学側との連携によるこうした音楽科教育活動を、次年度以降も継続させていく予定である。</li> <li data-bbox="252 947 1422 1122">・ 第4回オープン研修会が2019年1月24日（木）実施された。対象は1年生のクラス、鑑賞活動に着目しながら音楽科の学びの導入へと発展させた授業が提示された。学内・学外からの参加者による、教科を超えた活発な意見交換がなされた研修会であった。</li> </ul> <p data-bbox="272 1189 432 1218">附属中学校</p> <ul data-bbox="252 1238 1422 1554" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="252 1238 1422 1368">・ 本年度は、音楽文化の理解を深める目的として「我が国の伝統音楽」をテーマとした公開研究協議会が、6月1日（金）に開催された。研究授業では3年生を対象とし、日本の歌曲・滝廉太郎作曲《花》が取り上げられた。</li> <li data-bbox="252 1388 1422 1554">・ 大学との共同的な取り組みとして、2017年8月下旬以降数回にわたり、校内合唱コンクールに向けた指揮の指導（担当：石原慎司）が、中学校で実施された。中でも指揮の実践指導に関しては今後も継続し、さらには教員間の共同的な研究活動へと展開していく見込みである。</li> </ul> <p data-bbox="240 1621 660 1650">&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <p data-bbox="272 1671 1257 1700">附属小学校・附属中学校共通の課題として、以下の点が挙げられる。</p> <ul data-bbox="252 1720 1145 1749" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="252 1720 1145 1749">・ 大学と附属学校間による共同研究や共同実践授業等の着手。</li> </ul> <p data-bbox="272 1794 491 1823">&lt;次年度の体制&gt;</p> <p data-bbox="272 1832 523 1861">部会長：吉澤恭子</p> <p data-bbox="272 1870 523 1899">副部会長：石原慎司</p> <p data-bbox="272 1908 804 1937">書記：大山光子 小林葉子 江畑美香</p>			

部会名	図画工作・美術	記入者名	長瀬達也
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>1. 附属小学校の教育実習における連携（佐々木恵）</p> <p>(1)成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図画工作の授業を見たり実践したりする機会の少ない，他教科専攻の実習生にとって，とてもよい勉強の機会となった（材料の準備，個別の支援や声かけの仕方，作品の評価についてなど）。</li> </ul> <p>(2)課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業中の，一人一人の見取りについて子どもたちの実態を理解していないと，発想を広げるためのその子に合った声かけや支援などは難しいと感じた。</li> </ul> <p>(3)その他</p> <p>例えば1年生では，主免実習で1授業，副免実習で1授業の図画工作科の授業を行ったが，どちらの授業も教育実習生同士で協力して教材研究をして，意見を出し合っていたので，指導教員自身も大変勉強になった。特に美術教育が専門ではない教育実習生の視点があったことが，とても良かったように思う。</p> <p>2. 附属中学校の教育実習における連携（伊藤知佐子）</p> <p>(1)成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習生一人一人が自分の得意分野を生かしながら，題材開発に取り組むことができた。</li> <li>・教材研究において，教育実習生同士が意見を出し合いながら，授業展開の工夫や見本となる作品制作に取り組むことができた。</li> <li>・3学年12クラスの授業を，4人の教育実習生で分担し，同じ授業を2~4回実践することで，授業力を上げることが出来た。</li> <li>・授業後の研究会では，教育実習生が互いの授業の良かった点と改善点を出し合ったので，2週間で授業実践力を上げることができた。</li> </ul> <p>(2)課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・題材が平面表現に偏りがちであったので，鑑賞や立体表現などの題材にも取り組むことができればよかった。</li> <li>・PCやプロジェクターなどの機器を使用する余裕がなかったようであったので，一つの提示方法として実践させたい。</li> </ul> <p>3. 附属特別支援学校における連携（長瀬達也）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の美術教育に関する授業実践力を高めるために，附属特別支援学校小学部図画工作科の授業に参加する機会を計5回設けた。その一つを平成30年7月30日「全校造形教育研究大会秋田大会」で公開した。学生は，一人一人の発達段階や表現傾向などがまったく違うので，個別指導の重要性を理解することができた。</li> </ul>			

・秋田県造形教育研究会などが主催する7月30日「全国造形教育研究大会秋田大会」における秋田大学教育文化学部附属特別支援学校公開授業において、事前から授業アドバイザーとして参加した。そして、学習指導案作成への協力、材料・用具の研究、児童の学習活動の分析、支援学生への指導などを行った。

<次年度に向けた予定・課題等>

美術教育を専門としない小学校及び特別支援学校の教員が取り組みやすい題材の開発が必要。

<次年度の体制> 今後、検討していく。

部会名	体育・保健体育	記入者名	松本奈緒
<今年度の実績>			
<u>公開協議会共同研究</u>			
附属小学校	5年生 ハンドボール 3年生 ハンドボール		授業実践者：佐々木雅巳 授業実践者：高橋 亨 共同研究者：佐藤 靖 教材分析協力者：伊藤 恵造
附属中学校	1年生 バスケットボール		授業実践者：藤倉 修 共同研究者：松本 奈緒
<u>研究協力</u>			
附属小学校			
1) 子どもの描画分析にみる学習者の認知研究			
実践者：高橋亨 3年生・器械運動（マット運動）			
実践者：佐々木雅巳 5年生・器械運動（マット運動）			
研究者：松本 奈緒			
<u>附属学校園との連携のある大学での授業</u>			
「保健体育科教育学」での教師になったきっかけや業務についての講演			
外部講師：加賀谷武英 授業担当者：松本奈緒			
教職大学院のインターンシップ（陸上） 受入れ担当者：佐々木雅巳 実施者：渡辺雄介			
<次年度に向けた予定・課題等>			
・子どもの描画分析にみる学習者の認知研究は継続して附属小学校に協力をお願いしたい。（研究者：松本奈緒）			
・大学の授業の一環として、授業をみせていただくとありがたい。（大学から附属小・中へ）			
・中学校は公開研究協議会の公開の頻度が変わる予定。			
<次年度の体制>			
部会長：松本奈緒（大学）			
副部会長：佐々木雅巳（小学校）			
書記：藤倉修（中学校）			

部会名	英語（外国語活動）	記入者名	若有 保彦
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●学部の教育の充実に向けた共同の取り組み <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習事前指導における附属中での一日実習</li> <li>・大学院の「小学校英語の理論と実践」の授業の一環として、公開研究協議会の授業見学を行った。</li> <li>・小学校英語の専科教員として必要な知識技能を身につけることを目的とした「初等英語科教育学」の授業の一環として、附属小学校で学生が模擬授業を実施した。</li> <li>・英語教育コースの学生1名が附属小学校で、3名が附属中学校で、卒業研究の実験授業を実施させていただいた。</li> <li>・「外国語活動」の模擬授業において、附属小学校の石田先生から実地指導講師としてご指導いただいた。</li> </ul> </li> <li>●公開研究協議会などに向けた取り組み <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学教員と中学校英語担当教員または小学校外国語活動担当教員との打ち合わせ及び大学教員による事前の授業参観</li> <li>・附属小学校において、11月22日のオープン研での授業参観及び指導助言</li> </ul> </li> <li>●その他の取り組み <ul style="list-style-type: none"> <li>・附属中学校の国際交流室への英語教育専攻学生と留学生の協力</li> <li>・附属中学校において、2月21日の「授業を見合う会」での授業参観及びコメント</li> </ul> </li> </ul> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●公開研究協議会などに向けた取り組み <ul style="list-style-type: none"> <li>・来年度は附属小学校の公開研究協議会の研究協力者を佐々木雅子先生が、附属中学校の公開研究協議会の共同研究者を若有が担当する。</li> <li>・附属小学校では、前年度に引き続き、教科教育の教員だけではなく、教科専門の教員にも関わってもらい、教材選択や英語に関する知識などの面でアドバイスを行う。</li> <li>・公開研での授業の数を絞る方針が示されている。もし中学校の英語教員が2名とも転勤になった場合は5月の公開研では英語は行わず、10月のオープン研で授業を公開する可能性がある。</li> </ul> </li> <li>●その他の取り組み <ul style="list-style-type: none"> <li>・東北附連の大会が来年度は秋田で開催されるが、小学校外国語活動と中学校外国語の公開授業も行われることになっているため、準備を進める必要がある。</li> <li>・後任のALTについて</li> </ul> </li> </ul> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p>			

部会長：佐々木 雅子

副部長：小松 紳（転勤の場合は石田先生または原田先生）

書記：若有 保彦

部会名	技術・家庭科	記入者名	石川 優子 (所属 附属小学校 )
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p> <p>○公開研究協議会などに向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・消費分野を小中連携して、取り組むことができた。</li> <li>・小学校では修学旅行で使うお金の予算を立て、昼食で何を選択するのがいいか、いろいろ調べた上で、年齢や金額など相手に合った物を選択する学習を行った。中学校では、身近な商品を選択するときに気を付ける視点から販売者へ知らせる必要性の大切さを考える学習を行うことができた。</li> <li>・小学校は身近な自分のお金の使い方、中学校では保護者が働いて得た収入から経済を深く考えて行けるよう、連携することで発達段階に応じた消費生活を考えていくことができた。</li> <li>・事前授業や指導案検討を行い、大学と連携し、共同研究を進めていくことができた。</li> </ul> <p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <p>○生活の多様性を認め合う姿勢を今後も継続できるように、他分野でも研究していくことが大切である。特に家族・住生活においては、衣・食生活よりも授業の難しさがあるため、教師にはより具体的な理解を促すような指導の工夫が求められている。家族・住生活においても多様な価値観があるため、視点を広げ、児童生徒を育成していく必要がある。</p> <p>&lt;次年度の体制&gt;</p> <p>部会長 堀江さおり (秋田大学)</p> <p>副部会長 近藤史子 (附属中学校)</p> <p>書記 石川優子 (附属小学校)</p>			

<b>部会名</b>	生活・総合・遊び部会	<b>記入者名</b>	中野 良樹 (所属:こども発達・特別支援講座 )
<b>&lt;今年度の実績&gt;</b>			
<b>1. 学部における小学校、幼稚園との連携事業</b>			
① 平成30年6月8日、附属小学校公開研究協議会において学部教員との共同により提案授業を行った。授業者は附属小学校2年A組担任・福田佳子教諭、1年B組担任・嶋崎裕子教諭。学部からは学校教育課程所属の中野良樹教授が助言指導を、長瀬達也教授が教材分析協力を行った。			
② 平成30年11月20日(火) 幼小連携のTT授業研究会。1年B組「あきとなかよし大きくせん!」授業者: 嶋崎裕子教諭(附属小学校1年B組担任)、授業者: 今野文龍教諭(附属幼稚園)。研究協力者: 中野良樹(学校教育課程こども発達・特別支援講座)。			
③ 平成31年2月6日(水) 附属小学校生活科部内研。2年A組「あしたへジャンプ」。授業者: 福田佳子教諭(附属小学校2年A組担任)。指導助言者: 中野良樹(学校教育課程こども発達・特別支援講座)。			
<b>2. 附属小学校における他校園との交流活動</b>			
① 特別支援学校ふたば学級との交流			
1年生			
1回目 6月22日(金) 10:45~11:30			
場所: 附属小学校 内容: よつば学習「なかよくなろう」障害理解授業 特別支援学校の島津先生が来て授業			
2回目 7月12日(木) 12:30~13:20 19年2月13日			
場所: 附属小学校 内容: 一緒に給食を食べよう			
3回目 10月25日(木) 10:45~11:30			
場所: 附属小学校 内容: 一緒にダンス・一緒にリレー			
4回目 2月6日(水) 10:30~11:15			
場所: 特別支援学校 内容: 「大きなかぶ」の劇遊びと大玉ころがしゲーム			
2年生			
1回目 6月22日(金) 9:35~10:20			
場所: 附属小学校 内容: よつば学習「もっとなかよくなろう」障害理解授業 特別支援学校の島津先生が来て授業			
2回目 6月25日(月) 12:30~13:20			
場所: 附属小学校 内容: 一緒に給食を食べよう			
3回目 10月18日(木) 10:30~11:15			
場所: 特別支援学校 内容: 「ブレーメンの音楽隊」の劇で交流			
4回目 2月13日(水) 10:30~11:15			
場所: 附属小学校 内容: 一緒にダンスやゲーム, 作品づくりを楽しもう			

② 附属幼稚園との交流

1回目 なかよしタイムパートⅠ 9:00～9:45

場所：附属幼稚園 内容：幼稚園で遊ぼう

1A 5月10日(木) 1B 5月14日(月) 1C 5月16日(水)

2回目 なかよしタイムパートⅡ 9:35～10:20

7月 4日(水) 9:00～9:45 1B (附属幼稚園へ行こう)

7月11日(水) 9:00～9:45 1A (附属小学校で遊ぼう)

8月30日(木) 9:00～9:45 1C (附属小学校で遊ぼう)

3回目 秋のおもちゃランドで遊ぼう

12月11日(火) 10:00～10:45 (附属小学校1年棟)

4回目 おいでよ附属小学校へ

2月 1日(金) 9:00～11:00 (附属小学校)

体験入学で学校探検や学校体験をペアで行う

※ 1月25日に予定していたなかよしランチは、インフルエンザで幼稚園が学級閉鎖のため中止となる。

③幼少連携授業

11月20日(火) 13:40～14:25

幼少連携乗り入れ授業① 1B 生活科 「秋となかよし大きくせん」

TT 授業 附属小学校 嶋崎先生, 附属幼稚園 今野先生

11月26日(月) 13:40～14:25

幼少連携乗り入れ授業② 1B 生活科 「秋となかよし大きくせん」

TT 授業 附属小学校 嶋崎先生, 附属幼稚園 今野先生

3. 附属特別支援学校における他校園との交流および大学との連携

①小学部生活単元学習における校園間の交流

1) 附属小学校との交流

ふたば学級

期 日	対象学年・組	場 所	交流内容
6/25(月)	2年生3クラス	附属小学校はとの子ホール	給食交流
7/12(木)	1年生3クラス	附属小学校はとの子ホール	給食交流
10/18(木)	2年生3クラス	特別支援学校 体育館	劇遊び「ブレーメンのおんがくた

			い」で遊ぼう
10/25(木)	1年生3クラス	特別支援学校 体育館	劇遊び「ブレーメンのおんがくたい」で遊ぼう
2/6(水)	1年生3クラス	特別支援学校 体育館	劇遊び「おおきなかぶ」で遊ぼう
2/13(木)	2年生3クラス	特別支援学校 体育館	劇遊び「おおきなかぶ」で遊ぼう

わかば学級

期 日	対象学年・組	場 所	交流内容
7/3(火)	4年C組	附属小学校 4C	とんとん相撲、給食交流
7/4(水)	3年A組	附属小学校 3A	じゃんけん列車、給食交流
7/5(木)	4年B組	附属小学校 4B	〇×クイズ、給食交流
7/9(月)	4年A組	附属小学校 4A	わたしのすきなものゲーム、給食交流
7/12(木)	3年B組	附属小学校 3B	ロンド橋落ちたゲーム、給食交流
7/13(金)	3年C組	附属小学校 3C	小グループでのゲーム、給食交流
11/27(火)	3年C組	附属小学校 3C	給食交流
11/28(水)	3年A組	附属小学校 3A	給食交流
12/3(月)	3年B組	附属小学校 3B	給食交流
12/4(火)	3年C組	特別支援学校 小体	ピン倒しボールゲーム
12/6(木)	3年B組	特別支援学校 小体	ピン倒しボールゲーム
12/11(火)	3年A組	特別支援学校 小体	ピン倒しボールゲーム
12/13(木)	4年B組	特別支援学校 小体	ピン倒しボールゲーム
12/17(月)	4年C組	特別支援学校 小体	ピン倒しボールゲーム
1/21(月)	4年A組	特別支援学校 小体	ピン倒しボールゲーム

あおば学級

期 日	対象学年・組	場 所	交流内容
4/27(金)	5年C組	特別支援学校 プレイルーム	あおばランド、学校見学
6/14(木)	5年C組	特別支援学校 体育館	あおばランド体験
6/18(月)	6年C組	附属小学校 6C	ペットボトルボーリング、給食交流
6/20(水)	6年B組	附属小学校 6B	紙コップタワー、給食交流
6/21(木)	6年A組	附属小学校 6A	ペットボトルボーリング、給食交流
7/4(金)	5年B組	附属小学校 5B	小グループでのゲーム、給食交流
7/5(火)	5年A組	附属小学校 5A	小グループでのゲーム、給食交流

7 / 9 (月)	5年C組	附属小学校 5C	福笑い等、給食交流
12 / 13 (木)	5年A組	特別支援学校 体育館	あおぼランド
12 / 14 (金)	5年B組	特別支援学校 体育館	あおぼランド
12 / 17 (月)	5年C組	特別支援学校 体育館	あおぼランド
1 / 21 (月)	6年B組	特別支援学校 体育館	あおぼランド
1 / 28 (月)	6年C組	特別支援学校 小体	あおぼランド
1 / 31 (木)	6年A組	特別支援学校 小体	あおぼランド

## 2) 附属幼稚園との交流

### ふたば学級

期 日	対象学年	場 所	交流内容
6 / 18 (月)	全体	附属幼稚園	自由遊び
10 / 12 (金)	全体	附属幼稚園	やきいも交流
12 / 12 (水)	全体	附属幼稚園	もちつき交流
2 / 18 (月)	全体	附属幼稚園	雪遊び

## ②大学との連携

### 1) 外国語活動

あおぼ学級 留学生1～3名(杜先生を通じて個人へ依頼)

10月18日(木)、11月8日(木)、11月15日(木)、11月18日(月)  
 中学部 附中の国際交流室利用

11月16日(金)、12月4日(火)、1月28日(月)

### 2) 卒業論文への協力

・「特別支援学校における曲想を感じ自らの表現を引き出す音楽科の授業～リズムアンサンブルを題材として～」 協力者：中学部 斎藤 明

・「自閉症スペクトラム障害児の反響言語に関する検討―場面や心情の繋がりに着目して―」  
 協力者：中学部 柳田 栄基

・「ある自閉症スペクトラム障害児の他者へのアプローチを増やしていくための支援の検討」  
 協力者：中学部 櫻田 佳枝

### 3) 大学における講義担当

担当者 職・氏名	期 日	授業科目名
教頭 兜森 宏征	5 / 9 (水)	教職入門
主幹教諭 高橋 省子	5 / 10 (木)	特別支援教育の教育課程の実施と評価
主幹教諭 高橋 省子	5 / 17 (木)	特別支援教育の教育課程の実施と評価
主幹教諭 高橋 省子	5 / 24 (木)	特別支援教育の教育課程の実施と評価

教諭	高橋 基裕	7 / 9 (月)	個のニーズに応じたカリキュラムの編成
副校長	跡部 耕一	7 / 23 (月)	個のニーズに応じたカリキュラムの編成
主幹教諭	高橋 省子	12 / 13 (木)	こども発達援助論
養護教諭	小野 了子	1 / 11 (金)	公衆衛生看護管理論

**<次年度に向けた予定・課題等>**

上記交流事業の整理と活用。平成30年度公開研究協議会における授業提案、4年次卒業論文を活用した幼小と大学での共同研究の推進。

**<次年度の体制>**

部会長：中野 良樹 (教育文化学部学校教育課程こども発達・特別支援講座)

副部会長：福田 佳子 (附属小学校)

書記：森田紗也子 (附属特別支援学校)

部会名	道徳	記入者名	小室 真紀（附属小学校）
<p>&lt;今年度の実績&gt;</p>			
<p>①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み  ・指導案の書き方についての講義・演習  教育実習事前事後指導：11月8日（木）</p>			
<p>②公開研究協議会などに向けた取り組み  ・中学校の公開研究協議会に向けて事前打ち合わせ・指導案検討を行った。  事前打ち合わせ 5月9日（水）  公開研究協議会 6月1日（金）  ・小学校の公開研究協議会に向けて事前打ち合わせ・指導案検討を行った。  事前打ち合わせ 5月10日（水）  公開研究協議会 6月25日（金）</p>			
<p>③共同研究や共同授業などの取り組み  ・小学校のオープン研修会に向けて指導案検討，協議等を行った。  指導案検討会 10月12日（金）  オープン研修会 10月19日（金）  ・中学校の秋季授業研究会（オープン研修会）に向けて指導案検討，協議等を行った。  指導案検討会 10月18日（木）  秋季授業研究会 11月1日（木）</p>			
<p>④学外の研究・研修団体などに関わる取り組み  ・第54回全国小学校道徳教育研究大会（兼第37回秋田県道徳教育研究大会）への参加  11月8日（木）・9日（金）  ・第16回東北地区中学校道徳教育研究大会（（兼第37回秋田県道徳教育研究大会）への参加  11月8日（木）・9日（金）</p>			
<p>⑤部会の組織、運営などに関する取り組み</p>			
<p>⑥その他の取り組み</p>			
<p>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p>			
<p>1 公開研究協議会に向けた打ち合わせ、指導案検討  2 部会内での取り組み（小学校：オープン研修会、中学校：授業研修会 など）</p>			
<p>&lt;次年度の体制&gt;</p>			
<p>部会長：小池 孝範（秋田大学）</p>			
<p>副部会長：佐藤 優子（附属中学校）</p>			
<p>書記：小室 真紀（附属小学校）</p>			

部会名	生徒指導部会	記入者名	嵯峨 隆之 (所属 附属中)
<p>〈今年度の実績〉</p> <p>例年通り，附属4校園の養護教諭と心理担当教員で，事例検討会を開催する予定だったが，開催できていない。</p> <p>養護教諭の先生と心理士養成のための教育実習の必要があり，打ち合わせを実施した。</p> <p>本年度中に，SCの先生とも打ち合わせを実施予定。</p> <p>〈次年度に向けた予定〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習に関して，養護教諭の先生との打ち合わせ。</li> <li>・SCの先生との打ち合わせ。</li> <li>・事例検討会の実施。</li> </ul> <p>〈次年度の体制〉</p> <p>部会長：北島 正人先生（秋田大学）</p> <p>副部会長：</p> <p>書記：</p> <p>※出席者は2名しかおらず，体制に関しては決められない。</p>			

部会名	特別活動	記入者名	森 和彦 (所属：秋田大学) 藤島 美子 (所属 附属中) 渡部誠一郎 (附属小学校)
<b>&lt;今年度の附属中学校の実績&gt;</b>			
①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み			
<ul style="list-style-type: none"> <li>●学習指導案作成指導 11 / 15・・・指導要領についてと指導案の書き方についての講義・演習</li> <li>●教職大学院での講義 6 / 4・・・公開研究協議会での授業についての講義・演習</li> </ul>			
②公開研究協議会などに向けた取り組み			
<ul style="list-style-type: none"> <li>●題材名 進路選択と充実した人生の関わり - 「人生の樹」を活用してー ～新たな価値を見いだす話合いと自己評価～ 5 / 9 公開研指導案事前検討会 6 / 1 公開研究協議会【授業及び協議会】</li> </ul>			
③秋季校内研修会に向けた取組			
<ul style="list-style-type: none"> <li>●題材名 目指す将来像のために自分自身の生き方を見つめる ～学校行事と総合的な学習の時間をつなぐ話合いと自己評価～ 10 / 18 秋季研指導案事前検討会 11 / 1 秋季研校内研修会【授業及び協議会】</li> </ul>			
<b>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</b>			
①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み			
<ul style="list-style-type: none"> <li>●教育実習事前事後指導 指導要領についてと指導案の書き方についての講義・演習</li> </ul>			
②秋季校内研修会に向けた取り組み			
<ul style="list-style-type: none"> <li>●秋季校内研指導案検討会</li> <li>●秋季校内研修会【授業及び協議会】</li> </ul>			
<b>&lt;今年度の附属小学校の実績&gt;</b>			
○第1回オープン研修会に向けた取組			
9 / 20 オープン研修会 指導案検討会			
10 / 16 オープン研修会事前授業【授業・協議会】			
10 / 19 オープン研修会【授業・協議会】			
<b>&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</b>			

○附属中学校公開研究協議会への協力（6／1）

- ・附属中学校特活部への協力

○附属小学校公開研究協議会（6／8）での授業提示

- ・公開研に向けた指導案検討及び事前研究授業
- ・提案授業の成果と課題の見直し
- 教職大学院での公開研究のバックヤード解説講義

○教職大学院の授業を附属校園で実施し、附属の先生方からも指導をいただくのはどうか

<次年度の体制>

部会長：附属の特別活動を担当する大学教員

副部会長：附属中学校特別活動の主任教員

書記：附属小学校特別活動の主任教員

書記と副部会長は入れ替ることがあります。

部会名	進路指導（キャリア教育）	記入者名	教育文化学部 白木智昭
<p data-bbox="240 331 464 360">&lt;今年度の実績&gt;</p> <p data-bbox="268 378 786 407">特別支援学校より、以下の報告があった。</p> <ul data-bbox="304 425 1426 696" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="304 425 1426 506">・キャリア教育「作業学習」の一環として、附属中学校2年生との交流を実施（今年度で3年目）</li> <li data-bbox="304 524 1426 604">・大学のインフォメーションセンターで作業学習の成果発表と販売実習（若はとショップ）を実施（今年度に3回実施）</li> <li data-bbox="304 622 1426 696">・ターバックスコーヒーからインターンシップの受け入れの申し入れがあり、今年度は3名が参加（うち1名は採用）</li> </ul> <p data-bbox="240 813 660 842">&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <p data-bbox="268 860 1038 889">特別支援学校より、以下のような予定について報告があった。</p> <ul data-bbox="304 907 1426 1081" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="304 907 1123 936">・附属中学校との交流の頻度を多くしたいと考えている（調整中）</li> <li data-bbox="304 954 1145 983">・H31年度は、若はとショップを附属病院でも開催する予定である</li> <li data-bbox="304 1001 1426 1081">・地元企業での採用情報などをなかなか入手できない状況にあるので、地域文化学科と連携する企業で採用意向があれば、情報を提供してほしい</li> </ul> <p data-bbox="240 1198 464 1227">&lt;次年度の体制&gt;</p> <p data-bbox="268 1245 644 1274">特に報告はありませんでした。</p>			

部会名	学校経営	記入者名	鎌田 信 (所属 教育文化学部)
<p data-bbox="240 324 464 356">&lt;今年度の実績&gt;</p> <p data-bbox="240 421 1430 501">○教育実践研究支援センター、教員養成担当学部長補佐が附属学校園の支援に関わることによって支援体制に厚みが増した。</p> <p data-bbox="240 566 1430 647">○附属学校経営委員会を4回開催し、附属学校園全体に関わる諸事項を取り上げて協議を行った。</p> <p data-bbox="240 712 1430 792">○附属学校運営全学協議会を開催し、大学と附属学校園全体に関わる諸事項を取り上げて協議を行った。特に、施設・設備や財政に関わる事項を協議し、改善を行った。</p> <p data-bbox="240 857 1430 938">○附属学校地域連携協議会を開催し、秋田県教委、秋田市教委、各校園学校評議員から附属学校園へのニーズを出してもらい、協議を行った。</p> <p data-bbox="240 1003 1430 1084">○附属学校子どもの人権委員会を開催し、附属学校園におけるいじめなど、子どもの人権をめぐる状況について、保護者代表も交えて協議した。</p> <p data-bbox="240 1149 1430 1229">○2月28日実施の「あきたの教師力高度化フォーラム」において小学校副校長が「教師力をどのように高度化するか」というテーマでシンポジストとして参加し、議論が交わされた。</p> <p data-bbox="240 1294 1430 1375">○1月に附属学校園における実習について本学においてFDが開催され、4校園の副校長及び実習担当者が参加し、熱心な協議が実施された。</p> <p data-bbox="240 1440 660 1471">&lt;次年度に向けた予定・課題等&gt;</p> <p data-bbox="240 1480 1394 1512">○第三期中期計画にしたがって、平成31年度の年度計画の作成・実施・評価を適切に行う。</p> <p data-bbox="240 1529 1238 1561">○附属学校園の教職員の働き方改革について、一層検討し取り組む必要がある。</p> <p data-bbox="240 1579 1430 1659">○附属学校園全体の中期計画期間にわたるビジョンに基づいた行動プランの実施と検証を行う。</p> <p data-bbox="240 1677 1406 1709">○授業改善、校種間連携等について4校園全体として取り組み、成果をあげることを目指す。</p> <p data-bbox="240 1774 464 1805">&lt;次年度の体制&gt;</p>			

部会名	幼稚園	記入者名	山名裕子（所属：こども発達・特別支援講座）
-----	-----	------	-----------------------

<今年度の実績>

1. 附属教員の学部での授業

No.	授業名	実施日	担当者
1	教職入門	5月9日(水)	渡邊真紀
2	教育実習 事前事後指導	6月21日(木)	渡邊真紀・後藤笑美・菅生由香子・白畑展子・今野文龍
		11月29日(木)	後藤笑美・菅生由香子・白畑展子・今野文龍
3	こども発達援助論	12月6日(木)	白畑展子
		12月20日(木)	中村知江子

2. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

(1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録（大学教員の保育観察・記録 ～週1回程度）

① テーマ1：幼稚園教育課程の研究

(a) 自発的活動としての遊びを中心とした保育～子ども主体の生活を考える～  
（附属幼稚園研究テーマ）

(b) 幼児教育における計画概念の検討（奥山順子）

② テーマ2：遊びを中心とする保育を考える

③ テーマ3：幼児にとっての「集団」の意味（奥山順子）

④ テーマ4：幼児期の認知発達にふさわしい「学び」とは～幼児が遊びの中で学んでいること

～

（山名裕子）

⑤ テーマ5：子ども自らがつくる安全な環境（瀬尾知子）

(2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り

① 日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築 参与観察・保育参加

② 大学における保育講座（秋田乳幼児保育研究会）への附属教員の参加（6回）

③ 大学教員からの研究情報の提供

・研究会報の発行 『秋田乳幼児研究会報 第11号, 2019年3月』の発行予定

・「研究会たより」の発行 No.83～87

・幼稚園教員向け保育情報「さくら通信」の発行 No. 57～83（奥山）

(3) 保育実践研究・保育カンファレンス（学部教員の研究保育・園内研究会等への参加）

No.	実施日	内容	参加者	備考
-----	-----	----	-----	----

1	4月16日(月)	5歳児(そら組) 研究保育	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参観・研究会への参加
2	4月25日(水)	ビデオカンファレンス	奥山順子	講師
3	5月16日(水)	4歳児(ほし組) 遊びを語る会	瀬尾知子	参観・研究会への参加
No.	実施日	内 容	参加者	備 考
4	5月25日(木)	4歳児(ほし組) 研究保育	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参観・研究会への参加
5	6月4日(月)	第1回公開研究協議会 打ち合わせ	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	研究打ち合せ
6	6月7日(木)	3歳児(もり組) 研究保育	奥山順子	参観・研究会への参加
7	6月15日(金)	3歳児(はな組) 保育研究会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
8	6月12日(火)	5歳児(そら組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
9	6月20日(火)	第1回公開研究協議会 打ち合わせ	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	研究打ち合せ
10	6月28日(木)	公開研究会	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参加・コメンテーター
11	7月5日(金)	5歳児(そら組) 研究保育	奥山順子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
12	8月6日(月)	保育研修会「幼児の主体的な生活とは～幼児にとっての対話的な学びとは?～」	奥山順子・山名裕子	研修会講師(園外からの参加者もあり)
13	9月28日(金)	5歳児(そら組) 遊びを語る会	山名裕子	参観・研究会への参加
14	10月2日(火)	4歳児(ほし組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
15	10月3日(水)	3歳児(もり組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参観・研究会への参加
16	10月22日(月)	3歳児(はな組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参観・研究会への参加
17	11月6日(火)	第2回公開研究協議会 打ち合わせ	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	研究会打ち合わせ
18	11月16日(金)	第2回公開研究協議会	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参加・コメンテーター
19	2月26日(火)	5歳児(そら組) 研究保育 幼小相互乗り入れ TT 保育, 合同研究会	奥山順子	参観・研究会への参加

#### (4) 教育実習事後指導を通して

- ① 大学教員が事後指導において学生の保育記録をもとにしたカンファレンスを実施。
- ② 記録を練り直し、再考察をまとめたものを編集して冊子として作成。
- ③ 幼稚園教育実習の記録『たまご16号(2018年12月発行)』

### 3. 附属4校園の交流・参観

#### (1) 附属小学校

1年生と5歳児の交流(5月10日, 14日, 17日, 7月4日, 7月11日, 8月30日, 12月11日)

#### (2) 附属特別支援学校

- ① 高等部と5歳児のサツマイモ苗植え交流(5月11日)
- ② 全児童生徒と全園児の「竿燈交流」(7月19日)
- ③ 小学部ふたば学級と交流(6月18日, 6月12日, 2月18日)
- ④ 小学部ふたば学級と全園児の「おもちゃつき交流」(12月13日)
- ⑤ 小学部ふたば学級と全園児の「やきいもを食べよう」(10月13日)

### 4. 卒業研究における観察

- (1) 保育者が子どもを「受け止める」とはどういうことか—4歳児の集団活動場面を中心に—
- (2) 3歳児が遊びの中で感じる「居心地のよさ」—保育者とのかかわりを通して—
- (3) 幼児期の遊び場面における葛藤の諸相
- (4) 子どもの世界観に寄り添った幼児同士のつながりを支える保育者のはたらきかけ～遊び場面の参与観察を通して～
- (5) 幼児の葛藤場面において自己や他者の感情への気付きを促す教師の関わりについての検討

<次年度に向けた予定・課題等>

#### 1. 大学教員の継続的な参与観察とそれを生かした研究推進

- (1) 30年度同様に, 学部・附属幼稚園が連携, 協力してそれぞれの立場で研究を進め, その成果を幼稚園研究紀要, 学会誌への投稿, 学会発表によって地域等に発信する。
- (2) 双方の主体性が発揮できる対等な関係での共同研究体制の模索。

#### 2. 附属教員の学部での授業

教職入門, 教育実習事前事後指導, こども発達援助論

#### 3. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

- (1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録
- (2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り

日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築

- (3) 学部教員の研究保育・園内研究会・保育カンファレンスへの参加
- (4) 教育実習事後指導を通しての学生指導

#### 4. 大学教員の附属学校園の公開研究協議会などへの参加

- (1) 附属幼稚園で2回の公開研究協議会を実施予定  
第2回目は保育以外の企画（講演，シンポジウム等）を大学教員が担当
- (2) 公開保育の事前研究会への参加
- (3) 保育へのコメンテーターとしての参加

#### <次年度の体制>

部会長：奥山 順子

副部会長：小玉 史男

書記：山名 裕子

## 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会要項

(平成 24 年 9 月 13 日制定)

改正

平成 25 年 10 月 1 日一部改正

平成 26 年 9 月 11 日一部改正

平成 27 年 9 月 11 日一部改正

### (目的)

第 1 条 秋田大学教育文化学部附属学校運営会議要項第 8 条第 3 項の規定に基づき、秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会（以下「委員会」という。）を置く。

### (所掌事項)

第 2 条 委員会は、学部教員と附属学校園教員との共同・協力に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 学部・研究科の教育の充実に関すること。
- (2) 附属学校園での共同研究及び共同授業に関すること。
- (3) その他共同・協力に係る重要事項

### (組織)

第 3 条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 附属学校経営委員会委員長が指名する附属学校園長
- (2) 附属教育実践研究支援センター長
- (3) 附属教育実践研究支援センターから推薦された教員 1 名
- (4) 各附属学校園副校長
- (5) 第 8 条に定める各部会の部会長
- (6) 事務室長
- (7) その他委員長が必要と認めた者

### (任期)

第 4 条 前条第 3 号及び第 7 号の委員の任期は 1 年とする。ただし、再任を妨げない。

2 委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

### (委員長及び副委員長)

第 5 条 委員会に委員長及び副委員長を置く。

2 委員長は、第 3 条第 1 号の委員をもって充てる。

3 副委員長は、委員長が指名する。

### (議事)

第 6 条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数の場合は、委員長の決するところによる。

### (委員以外の者の出席)

第 7 条 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、その意見を聴くことができる。

(部会)

第 8 条 部会は、教科別部会、領域別部会、校園別部会及びFD部会とする。ただし、教科別部会、領域別部会及び校園別部会は次に掲げる各部会で構成する。

2 教科別部会は、国語部会、社会部会、算数・数学部会、理科部会、音楽部会、図画工作・美術部会、体育・保健体育部会、技術・家庭部会、英語部会（外国語活動を含む）及び生活・総合部会とする。

3 領域別部会は、総合部会（生活単元学習、遊びの指導、生活科を含む）、道徳部会、生徒指導部会（個別支援、保健指導を含む）、特別活動部会（話し合い活動、学級活動、学校行事を含む）、進路指導部会（キャリア教育を含む）及び情報教育部会（情報機器の活用を含む）とする。

4 校園別部会は、幼稚園部会、小学校部会、中学校部会及び特別支援学校部会とする。

(部会の構成員)

第 9 条 学部教員及び附属学校園教員は、一つ以上の部会に所属するものとし、複数の部会への所属を妨げない。

2 各附属学校園は、領域別部会の各部会に 1 名以上を選出する。

3 各附属学校園は、校園別部会の他校園部会に 1 名以上を選出する。

(部会の組織)

第 10 条 各部会は、互選により、次の各号に掲げる者を選出する。

(1) 部会長 1 名

(2) 副部会長 若干名

(3) 記録 1 名

2 前項各号の者の任期は 1 年とし、再任を妨げない。

3 欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(庶務)

第 11 条 委員会の庶務は、事務部において処理する。

(補則)

第 12 条 この要項に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

1 この要領は、平成 24 年 10 月 4 日から実施する。

2 この要領の実施後最初に委嘱される委員の任期は、第 4 条の規定にかかわらず、平成 26 年 3 月 31 日までとする。

附 則(平成 25 年 10 月 1 日一部改正)

1 この要領は、平成 25 年 10 月 1 日から実施する。

- 2 この要領実施の際、現に委嘱されている第3条第3号及び第7号の委員の任期は、改正後の第4条第1項の規定にかかわらず、平成26年3月31日までとする。

附 則(平成26年9月11日一部改正)

- 1 この要項は、平成26年9月11日から実施する。
- 2 この要項実施の際、現に委嘱されている改正後の第3条第4号及び第8号の委員の任期は、改正後の第4条第1項の規定にかかわらず、平成28年3月31日までとする。

附 則(平成27年9月11日一部改正)

- 1 この要項は、平成27年10月1日から実施する。
- 2 この要項実施の際、現に委嘱されている改正後の第3条第3号及び第7号の委員の任期は、改正後の第4条第1項の規定にかかわらず、平成28年3月31日までとする。

附則

この規程は、平成30年4月1日から実施する。

## 秋田大学教育文化学部学部・附属学校学部共同委員会に関する申し合わせ

(平成 22 年 7 月 8 日制定)

改正

平成 25 年 10 月 1 日一部改正

平成 26 年 9 月 11 日一部改正

- 1 委員会の日常的な運営は、副委員長が担当し、各部会との連絡調整、各部会の名簿作成及び報告書作成の調整などを行うものとする。
- 2 各部会は、年度当初に年度活動計画書を策定し、年度末に年度計画の実施状況等を年度活動実績報告書にまとめ、それぞれ委員会に提出する。
- 3 部会が作成する年度活動計画書及び年度活動実績報告書の記載内容には、次の項目を盛り込むことが望ましい。
  - (1) 学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み
  - (2) 公開研究協議会などに向けた取り組み
  - (3) 共同研究や共同授業などの取り組み
  - (4) 学外の研究・研修団体などに関わる取り組み
  - (5) 部会の組織、運営になどに関する取り組み
  - (6) その他の取り組み
- 4 毎年度当初、学部教員及び附属学校園教員に対し、部会所属の希望調査を行い、部会の構成員を確定した後、名簿を作成する。
- 5 名簿には、部会構成員の氏名、所属、内線番号及びメールアドレスを掲載し、学部教員及び附属学校園教員全員に配布する。日常的な連絡はメールを活用する。
- 6 部長と副部長は、学部教員と附属学校園教員とで分担することが望ましい。
- 7 各附属学校園から選出され、領域別部会に所属する附属学校園教員が、他の部会にも所属する場合には、領域別部会の活動を優先する。
- 8 委員会は、附属学校園教員の領域別部会での活動と他の部会での活動が当該教員の過度の負担とならないよう、可能な限り配慮する。
- 9 部会は、年度当初及び年度末に全体会を開催するように務める。
- 10 委員会は、全学部・附属学校教員を対象として、年 1 回以上、総会を開催する。

附 則

この申し合わせは、平成 22 年 7 月 8 日から実施する。

附 則(平成 25 年 10 月 1 日一部改正)

この申し合わせは、平成 25 年 10 月 1 日から実施する。

附 則(平成 26 年 9 月 11 日一部改正)

この申し合わせは、平成 26 年 9 月 11 日から実施する。

平成30年度附属学校学部共同委員会編集部

委員長 藤井 慶博（大学院教育学研究科）

副委員長 高田屋 陽子（こども発達・特別支援講座）

平成30年度 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会 実践報告書

発行 平成31年3月20日

編集 附属学校学部共同委員会編集部

発行者 秋田大学教育文化学部